

付加のメカニズム

——目的節認可の諸条件——¹

赤 楚 治 之

I

付加詞 (adjunct) が文に組み込まれるためには、クリアしなければならぬ様々な条件があることはよく知られている。例えば、内在的な意味として「未来」を表す *tomorrow* は過去を述べる文の付加詞としては、意味的整合性を損うので不適切であるし、動詞とその目的語の間の付加詞が入り込むことは、GB 理論で言うところの格理論の隣接条件に抵触するために不可能となる。このように、文と付加詞が結合するには、統語論から意味論に及ぶ様々な知識 (意識的なものであれ、無意識的なものであれ) が要求されるのである。

本稿では、付加詞の中でも、副詞的用法の「目的」を表す *to* 不定詞の名称で親しまれている付加現象を取りあげ、それがどのような条件の下で主文 (Matrix Sentence) に結合されるのかを考察する。従来の学校文法等で言及されている基本的な条件の他にも、ここ十年來の統語論研究によって、付加が認められるケースがあることが明らかにされてきた。近年発掘された、そのような言語事実に対し提案された二つの分析法の知見を採り入れながら受動形態素 (Passive Morpheme) に外項が転送されるという考え方を支持する方向で、目的節付加のメカニズムを記述し、整理することがこの研究の目的である。

II

to 不定詞における副詞的用法の「目的」を表す構文は、生成文法の文献のなかでは一般的に“Rationale Clause (目的節)”の名称で呼ばれている。類似した構文に“Purpose Clause (以下 PC と略す)”があり、しばしば両者を見分けることが不可能な場合もあるが、次に示すように両構文は異なった統語論的・意味的分布を呈するので、区別される²。

- (i) 目的節は *in order (for NP)* に導かれることが出来るが、PC は出来ない。
- (ii) 目的節は空所を持たない。
 - a. *John bought the piano in order for Mary to practice on—.
 - b. John bought the piano for Mary to practice on—.
- (iii) 目的節は前置が可能である。
 - a. For Mary to practice on the piano, John bought it.
 - b. *For Mary to practice on—, John bought the piano.
- (iv) PC と主文の動詞の間には厳しい意味的制約があるが、目的節にはない。
 - a. *Mary destroyed the board to play chess on—.
 - b. John destroyed the house (in order) to collect insurance.

本稿の研究対象は目的節である。ではこのような特徴を持つ目的節はどのような条件の下で主文に付加されるのであろうか。その考察を始める時にまず思いつくのは、我々に馴染み深い学校文法でよく言及される次のような説明であろう。学校文法では、to 不定詞には「目的」を表す用法があるとした上で、次の二つの場合に分けて説明するのが一般的である。

- (A) 文の主語と不定詞の主語が一致する場合。

a. He went to France to learn French.

b. They stopped to ask the way.

(B) 一致しない場合. 不定詞の意味上の主語としての for NP を明示する.

a. The man stood aside for Jane to enter the room.

b. I told him the news instantly in order for him to ease his mind.

次にこの説明を, 目的節付加のための条件として, 生成文法の視点から捉え直してみる. 生成文法では to 不定詞の主語が名詞として (つまり lexical item として) 現れない時には, その位置に音声的に非具現の要素 PRO が存在していると考えられる. すると(A)の各文は次のような表示を持つことになる.

(A) a. He went to France [PRO to learn French]

b. They stopped [PRO to ask the way]

目的節が正しく主文に付加されるには, PRO の先行詞として主文の主語が選ばなければならない. 例えば次例(1)において

(1) Mary talked to Bill in Spanish [PRO to make $\left\{ \begin{array}{l} \text{herself} \\ * \text{himself} \\ * \text{themselves} \end{array} \right\}$ understood]

主語 Mary が目的節の PRO をコントロールしていない場合は非文となる. つまり(A)の説明は, 主文の主語が PRO をコントロールすることが正しい付加のための条件のひとつであると解釈できる. 以下, 便宜上, この条件を Subject コントロール (Sub コントロールと略す) と呼ぶことにする.

他方, (B)の説明は Sub コントロールが適用されない場合にこの条件に合っていないければ付加が許容されないことを述べている (B条件). これについては第V節で取りあげることにし, ここでは Sub コントロールの相補的な

役割を果たす条件としておく。

III

前節で見たように、目的節の付加には二つの条件があり、どちらか一方を満たすことが要求される。本節では上の二条件のどちらをも満たさないが文法的な付加とされる例を紹介し、そのような付加に対して最近の文法理論がどのような説明を試みているのかを概観する。

次例(2)が示すように、Sub コントロールが働いておらず、また先のB条件も満たしていないにもかかわらず、文法的な付加と判断される文がある³。

- (2) a. The boat was sunk to collect the insurance.
- b. The price was decreased to help the poor.
- c. This bureaucrat was bribed to avoid the draft.

例えば(2 a)にSub コントロールが働くとすれば、「ボート(無生物)が保険金を受け取るために、…」という逸脱した意味を持つ文になってしまう。故に、(2)の表示は次のようなものと考えられる。

- (3) a. The boat_i was sunk [PRO_j to collect the insurance]
- b. The price_i was decreased [PRO_j to help the poor]
- c. This bureaucrat_i was bribed [PRO_j to avoid the draft]

(ただし $i \neq j$)

では一体、これらの文における目的節付加を認める条件は何であろうか。それを探る手がかりを与えてくれるのが(4)の例である⁴。

- (4) a. *The boat sank to collect the insurance.
- b. *The price decreased to help the poor.
- c. *This bureaucrat bribes easily to avoid the draft.

(4)の表示は次の通りである。

- (5) a. The boat_i sank [PRO_i to collect the insurance]
- b. The price_i decreased [PRO_i to help the poor]
- c. This bureaucrat_i bribes easily [PRO_i to avoid the draft]

(ただし $i \neq j$)

(3)と同様に、主文の主語が目的節の PRO をコントロールしているとは考えられないので(5)のような表示になる。にもかかわらず(2)は文法的と判断され、(4)は非文と判断される。この現象に対して近年の統語論研究は、これらの目的節付加の可否を決定しているのは、両者における主文の predicate の違い(つまり(2)では受動態が、(4)ではいわゆる自動詞が用いられている)だと考え、(2)には目的節の PRO をコントロール出来る要素が主文の predicate に存在していると分析する。この考えを支持する研究者たちは、受動形態素 (Passive Morpheme) の EN がコントローラの役割を果していると主張している。この考え方によると(2)の表示は概ね次のようだと考えられる。

- (6) a. The boat was sink+EN_i [PRO_i to collect the insurance]
- b. The price was decrease+EN_i [PRO_i to help the poor]
- c. The bureaurat was bribe+EN_i [PRO_i to avoid the draft]

受動形態素 (EN) は、対応する動詞の外項を担う役割を果し、それが目的節の PRO をコントロールすることで目的節の付加が認可され、文法的な文となる。この分析を EN コントロールと呼ぶことにする。

本稿では、受動形態素に外項が転送されるとする、Jaeggli や Baker, Johnson, and Roberts の主張を正しいものと仮定する。その場合、EN コントロールは目的節付加の条件として認められることになるが、クリアしなければならないいくつかの問題点が残る。それは EN コントロールを認めない(つまり受動形態素に外項はないとする)学者たちによって指摘された

問題である。EN コントロールに拠らない方法で(2)の現象を説明しようとする学者たちが拠る所にするのは、Williams の研究であるので、次節では彼の EN コントロールに対する反論と、彼の主張する分析を見ることにする。

IV

Williams は先ず次のような例文を挙げ、そこに二通りの解釈があることを指摘する⁵。

(7) John went to New York to annoy Mary.

- a. ジョンがメアリーを悩ませるためにニューヨークへ出かけた。
- b. ジョンがニューヨークへ出かけること自体がメアリーを悩ませる。

それぞれの表示は概ね次のようになる。

(7) a. John_i went to New York [PRO_i to annoy Mary]

b. [John went to New York]_i [PRO_i to annoy Mary]

c. The event itself of John's going to New York will annoy Mary.

(7 b) の解釈は (7 c) のようにパラフレーズすることが可能であり、ここでは主文全体が PRO をコントロールすることから、Williams は S コントロールと呼んでいる。

彼の考えによると、この S コントロールが前節で見た(2)の例文にも関係していることになる。つまり(2)の表示は、(6)ではなく次の(8)だと考える。

(8) a. [The boat was sunk]_i [PRO_i to collect the insurance]

b. [The price was decreased]_i [PRO_i to help the poor]

c. [This bureaucrat was bribed]_i [PRO_i to avoid the draft]

S コントロールの優位性を主張する重要な根拠として、次の(9)の各文が、(2)と同じ構造を持つにもかかわらず非文と判断されることを挙げている。

- (9) a. *Mary was arrested to indict Bill.
- b. *The door was opened to become cooler.
- c. *The boat was sunk to become a hero.

受動形態素 (EN) に動詞の外項が存在するならば, (9)の各文でも EN コントロールがおこなわれるはずであるが, これらの文が非文となるのは, その分析が誤まっているからだと結論づけている。同時に, (9)の非文は, (10)のようなパラフレーズが成立しないために, つまり主文全体が目的節の PRO のコントローラになれないことから説明できると主張する。

- (10) a. *An arrest could indict someone.
- b. *The opening of the door could become cooler.
- c. *The boat's sinking could become a hero.

さらに, EN コントロールでは説明できないものとして次の例を挙げている。⁶

- (11) a. Grass is green to promote photosynthesis.
- b. The doors are red to make them attractive to first graders.

主文には受動形態素が存在しないにもかかわらず, 目的節の付加が許容されている。そこに Sub コントロールが関与しないことは, 例えば, 次の(12)の文が非文であることからわかる。

- (12)* The doors are red to make themselves attractive to first graders.

もし Sub コントロールによって(12)の目的節の PRO が the doors を先行詞とするならば, 目的節の中の目的語は再帰形になるはずであるが, 実際は非文である。このことは, (12)では Sub コントロールが働いていないことを示している。

以上、本節では EN コントロールに対する反論及び S コントロールの優位性を Williams に従い概観した。

V

本節では、まず S コントロールによる分析の問題点を取り上げ、S コントロールが(2)のような現象のすべてを説明することが出来ないことを指摘する。その後で、EN コントロールの反例として出された例を再検討し、それらが真の反例にならないことを論じる。

S コントロールは、主文自体を名詞化したものと、目的節で用いられる動詞との間に見られる semantic compatibility によって直接的に検証することが可能である。この方法を用いると次の (13 b) のように名詞化して主語となることが出来ないにもかかわらず、(14 b) のように文法的な付加と判断される文があることがわかる。⁷

- (13) a. The opening of the door proved a point.
- b. *The opening of the door entered the room.
- (14) a. The doors were opened to prove a point.
- b. The doors were opened to enter the room.

次に、(15)のような文は存在するが、(16)のようにパラフレーズすると非文となる文もある。⁸

- (15) Smoking marijuana became illegal in 1930's.
- (16)* Marijuana was smoked to become illegal in 1930's.

これらの例は S コントロールで説明できないが、EN コントロールでは説明できるものである。

ここで EN コントロールの反例として挙げられた(9) [(17)として再録] を詳しく検討し直し、それらが真の反例ではないことを論じたい。

- (17) a. *Mary was arrested to indict Bill.
 b. *The door was opened to become cooler.
 c. *The boat was sunk to become a hero.

(17 a) から考察を始める。この例文において EN コントロールが機能しない理由のひとつの可能性として、主文の動詞 *arrest* が固有の特質として受動形になっても外項が、EN に転送されないという性質を持つと考えられるかもしれない。もし仮に外項の EN への転送が各語彙項目によって異なるとすれば、EN コントロールの一般性を損う大きな障害となるだろう。しかし次例(18)が示すように、目的節の表現を他のものに入れ換える時には文法的な付加となることから、EN への外項の転送を各語彙項目の特質によるとする考え方は成立しないことがわかる。

- (18) The murder was arrested to save the villagers' lives.

さらに (17 a) で目的節の中で用いられている動詞 *indict* も、主文の表現を他のものに換えることで文法的な文となることも確認されている。

- (19) Mary was questioned (in order) to indict Tom.

以上の事から、EN にはどの場合も外項が転送されるが、(17 a) では EN コントロールが機能するのを防げる何らかの「力」が働いていると考えられる。

ここでその「力」とは何かを特定化する必要があるのだが、それが統語論的なものとは考えられない。文法形式（統語論）上の観点から言えば、コントロールが働く状況であるのに、実際には非文と判断されるということは、何らかの文法外の要因 (extragrammatical factors) が働いていると考えるのが合理的であろう。そこで我々は “purposiveness” という概念を導入し、主文に目的節が付加されるには、この “purposiveness” 条件に適合しなければ

ばならないと仮定する。暫定的に、この記述的な条件を次のように規定する。

Purposiveness 条件

主文と目的節の間には手段と目的の関係が成立しなければならない。

この条件がどのように作用するのかを次例(20)を用いて説明しよう⁹。

(20) a. *John accidentally let the cats out of the room (in order) to have some peace and quiet.

b. *Tom went to Amsterdam (in order) for Mary to buy diamonds.

(20 a) では、第Ⅱ節で見た Sub コントロールが働くはずであるが、主文にある副詞 accidentally の持つ意味素性 [-INTENTIONAL] が Purposiveness 条件に抵触し、全体として容認されない文となっている。(20 b) は第Ⅱ節で確認した B 条件 (つまりコントロールの関与しない、目的節付加認可条件) を満してはいるが、手段 (主文) と目的 (目的節) の関連性が極めて希薄と判断されるために、容認されない。

このように Purposiveness 条件が働くわけであるが、先の (17 a) が非文と判断されるのも、この条件が関与していると考えられる。つまり、EN コントロールは機能しているものの、意味解釈のレベルで働く最終的なチェック機能の役割を果たす Purposiveness 条件をクリア出来なかった文が (17 a) なのである。

(17 a) の非文法性が EN コントロールの不備が原因でないことを見た所で、次に (17 b), (17 c) について考えてみたい。

これらの文は上で見た Purposiveness 条件からは説明することは出来ない。それは、例えば (17 b) の目的節とほぼ同じ内容を持つ目的節(21)は文法

的と判断されるからである。¹⁰

(21) The door was opened to let air in.

(17b) の to become cooler と(21)の to let air in の両者の間に, Purposiveness 条件の観点から説明できる意味上の差を見つけ出すことは困難である. このことから (17b), (17c) の持つ非文法性は統語論的な問題に起因すると考えられる.

この問題を考える前に, EN コントロールの持つ特質のひとつを考察する必要がある. 次の各文では目的節の predicate として, a では能動態が, b では受動態がそれぞれ用いられているが, a が文法的と判断されるのに対し, b は非文となる.^{11,12}

(22) a. The gifts were brought [PRO to impress the Indians]

b. *The gifts were brought [PRO to be admired by the Indians]

(23) a. The report was carefully prepared [PRO to impress the board of directors]

b. *The report was carefully prepared [PRO to be congratulated by the board of directors]

(24) a. The structure of DNA was investigated [PRO to advance our knowledge of molecular biology]

b. *The structure of DNA was investigated [PRO to be awarded the Noble Prize]

Jaeggli は, この事実から EN コントロールはD構造のレベルで成立すると結論づけている. つまり受動態の主語は派生主語 (derived subject: "Move α " によりS構造の主語の位置に移動している) であり, D構造では主語の位置にない. そこで, EN コントロールはD構造の主語の位置にある PRO をコントロールできるが, S構造における派生主語はできないと考え

る。

この特性が (17 b), (17 c) の非文に説明を与えてくれる。これらの例の目的節で用いられている動詞 *become* は, *be*, *seem* 等の動詞と同じく Linking verbs と呼ばれているものである。最近の研究では Linking verbs を非対格動詞 (Unaccusative verbs) とみなす主張が繰り返されている¹³ 非対格動詞とはS構造の外項がD構造において内項として存在していると考えられる動詞である。これを図示したのが(25)である。

(25) Unaccusative verbs

D構造 [___ V NP₁ ...]⇒

S構造 [NP₁ V t_i ...]

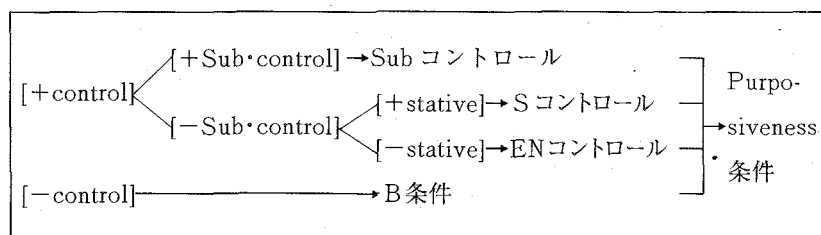
そこで Linking verbs も Unaccusative verbs であるという考えを採用すると, passive の場合と同様に Linking verbs の主語も “Move α” によって移動してきた派生主語だとみなすことが出来る。先に見た (22 b), (23 b), (24 b) の様に, EN コントロールはD構造で働くので, 派生主語をコントロールすることは不可能であった。このことから, (17 b) と (17 c) の非文法性は, 目的節の動詞に Linking verbs の *become* が用いられていることから, EN コントロールが働かないことに起因するものだと考えられる。

以上, 本節ではSコントロールの問題点を見た後, EN コントロールの反例として指摘された (17) を再検討した。(17 a) は意味解釈のレベルでの Purposiveness 条件により排除され, (17 b), (17 c) はコントロール理論によって排除されることを指摘した。これにより, (17) は決して EN コントロールを否定するものではなく, (17 b), (17 c) の非文の存在は, 逆に EN コントロールの存在の裏付けとなることがわかる。

VI

本稿では, 目的節が正しく付加されるための条件を, 受動形態素に外項が

転送されるとする考え方を支持する方向で見てきた。第Ⅱ節で基本的な条件として、Sub コントロールが関与する場合と、関与しない場合の二つがあることを確認した上で、どちらにも適てはまらない付加の現象を紹介し、EN コントロールによる分析の説明を概観した（第Ⅲ節）。次に代案としてのS コントロールによる分析と、その優位性の根拠となる、EN コントロールの反例を取りあげた後（第Ⅳ節）、S コントロールの問題点を指摘し、S コントロールが決して絶対的優位な分析でないことを見た。そこで、EN コントロールの反例とされていた例文(9)を再検討し、それが実際には反例には当たらないことと、目的節の付加には Purposiveness 条件が意味解釈のレベルで、最終的な検閲を行うことを論じた（第Ⅴ節）¹⁴。ここで我々が論じてきた付加の条件を整理すると次のようにまとめられる¹⁵。



注

- 1 本稿は第13回日本比較文化学会全国大会（1991年6月1日、梅花短期大学）において「“Implicit Argument” 論争」と題して行った口頭発表に、加筆・修正を施したものである。本文中の例文についてチェックして頂いた W. Herlofsky 氏と原稿段階で有益なコメントを頂いた山内信幸氏の二人に感謝する。
- 2 Rationale Clauses と Purpose Clauses の差異については、Robert A. Faraci, *Aspects of the Grammar of Infinitives and FOR-phrases* (unpublished doctoral dissertation, MIT, 1974) に拠る。また本稿では Faraci に従い、Rationale Clauses と Object Clauses を区別して考えている。Object Clauses とは主節の theme が目的節の PRO をコントロールする文をいう。次例参照。

- (i) Ann sent Alex_i to Toronto [PRO_i to spend some time by himself]
3. (2 a), (2 b), (2 c) はそれぞれ, T. Roeper, "Implicit Arguments and the Head-Complement Relation," *Linguistic Inquiry*, 18: 2 (1987): 268, N. Chomsky, *Lectures on Government and Binding*, (Dordrecht: Foris, 1981): p. 143, M. Baker, K. Johnson, and I. Roberts, "Passive Arguments Raised," *Linguistic Inquiry*, 20:2 (1989): 221 からの引用である。
- 4 (3)と(4)に見られる違いを最初に指摘したのは1980年に manuscript として発表された M. R. Manzini の論文であるとされている。彼女の論文は "On Control and Control Theory" の題で *Linguistic Inquiry*, 14: 3 (1983): 421-446 に掲載された。
- 5 この節の例文は (11 b) 及び(12)を除いてすべて Edwin Williams, "PRO and Subject of NP," *Natural Language and Linguistic Theory*, 3 (1985): 297-315 からの引用である。
- 6 例文 (11 b) は Jane Grimshaw, *Argument Structure* (Cambridge, Mass: The MIT Press, 1990): p. 132 から引用。
- 7 例文(13)及び(14)は T. Roeper (1987), 277 からの引用。
- 8 例文(15)及び(16)とその説明は, R. Clark, *Thematic Theory in Syntax and Interpretation*, (London: Croom Helm, 1990) に拠る。
- 9 例文 (20 a) は Faraci (1974), p. 33 からの引用。
- 10 例文(21)は Grimshaw (1990), p. 130 から引用。
- 11 例文(23)~(24)は O. A. Jaeggli, "Passive," *Linguistic Inquiry*, 17: 4 (1986): 617 からの引用。これに対し, Sub コントロールの場合は目的節が受動態であっても文法的となる。次例参照。
- (i) John sank the ship [PRO_i to be promoted]
- (ii) John took a vote [PRO_i to be elected president]
- 12 例文 (22 a), (23 a) で, 目的節に *impress* という心理動詞 (frighten 型) が用いられている。このタイプの心理動詞に関しては A. Belletti and L. Rizzi, "Psych-Verbs and θ -Theory," *Natural Language and Linguistic Theory*, 6 (1988): 291-352 や D. Pesetsky, "Binding Problems with Experienser Verbs," *Linguistic Inquiry*, 18: 1 (1987): 126-140 では, D 構造で VP 内にあった項 (THEME) が S 構造で主語の位置に移動したものである (派生主語) であるという分析がおこなわれている。しかしここでは Grimshaw (1990) の分析を採る。つまり frighten 型心理動詞の THEME は argument structure においては内項であるが, 彼女の提案する Aspectual Prominence 理論により D 構造では主語の位置に存在するという考え方を採用する。

- 13 例えば, J. E. Emonds, *A Unified Theory of Syntactic Categories* (Dordrecht: Foris, 1985), p. 61 や 原口, 鷺尾『変形』(東京: 研究社, 1988年), p. 414 などが挙げられる。
- 14 Purposiveness 条件よりもさらに後の段階において stylistic な条件が絡んでくる可能性もある。EN コントロールの文はしばしば修辞学的観点から, Dangling Modifier として避けられる傾向がある。
- 15 S コントロールは例文(11)を説明する場合に必要となる。また本稿では触れることが出来なかったが, Williams (1985), 313 や Faraci (1974) p. 33 が指摘するように, 主文に conditional predicate (*necessary, sufficient* 等) や一部の法助動詞 (*must* 等) が現れる場合には, たとえ Purposiveness 条件に抵触する時でさえ付加が許されることが知られている。

(i)* Ivan was tall to attract attention.

(ii) Ivan must be tall to attract attention.

なお, EN コントロールか S コントロールかは, それを含む文法の全体的なわく組みによって決定される。そのために, 本稿で支持した受動形態素に外項を認める考え方を支持しない文法のわく組みでは, この表と異なるものとなるだろう。